

調査・研究

植物

自生する草本植物の種のレベルや分布状況を調査、今では希少なクマガイソウ、カザグルマ、マヤランなどを確認しました。また北総の野生種クサナギオゴケも多く見られました。それらをもとに保護・保全に取り組んだ結果、個体数の増加や拡がりが見られるようになりました。一方、生育場所の状況の変化に対応できず、消滅したと思われる植物もあります。継続して調査、状況把握に努めていくようにしています。

自生が確認された重要・保護植物

種名	科名	絶滅危惧種 RL			特徴など
		環境省	県	市	
アマナ	ユリ科		C	C	地中の鱗茎が食用になり、甘い
イカリソウ	メギ科		C	B	春 船の碇に見立てた花
イガホオズキ	ナス科		C		ホオズキに似る。果実に突起がある
イチョウウキゴケ	ウキゴケ科	NT	D		コケ植物、イチョウの葉の形
エビネ	ラン科	NT	D	A	春 茎に多数のラン科の花
カザグルマ	キンポウゲ科	NT	B	A	春 クレマチスのような白い花、
キンラン	ラン科		D	A	春 半開の黄色いラン科の花
ギンラン	ラン科		D	A	春 白いラン科の花 全体に小型
クサナギオゴケ	キョウチクトウ科	VU	D	A	初夏 つる状 赤紫色の小さい花
クマガイソウ	ラン科	VU	B	A	春 ユニークな花 扇状の大きい葉
クロヤツシロラン	ラン科		C	A	秋 落ち葉色の花 果穂が伸びる
ササバギンラン	ラン科		D	A	春 笹のような葉の間に白い花
シソクサ	オオバコ科		D		秋の田んぼ、シソの香り、白い花
ジュウニヒトエ	シソ科		D	B	春 花が幾重にも重なる
トモエソウ	オトギリソウ科		C	A	夏 5枚の花弁が巴形に歪んだ黄色い花
マヤラン	ラン科	VU	C	B	秋 白色に紅紫色の斑点のラン科の花
ヤブムグラ	アカネ科		C	B	茎は無毛 葉は4枚輪生
ヤマタツナミノソウ	シソ科		C	B	春 薄紫色の花
ワニグチソウ	キジカクシ科		C	A	春 鰐口に似た苞の中に淡緑色の花

堂谷津の里で保護する里山植物

堂谷津の里では、自生が確認された希少な植物を保護するとともに、かつての里山で普通に見られた植物(★印)が少なくなっていることから、これらも保護して里山の景観を守っていくこととしました。

アカネスミレ	スミレ科			★	鮮やかな赤紫色の花のスミレ
アマドコロ	キジカクシ科			C	ナルコユリに似るが茎が角張る
イチヤクソウ	ツツジ科			B	初夏、伸びた茎に丸みのある白い花
イヌショウマ	キンポウゲ科			C	秋 白い穂状の花
オオバトソウ	ラン科			B	初夏 黄緑色のトンボが飛んでいるような花
オオハナワラビ	シダ科			C	秋～冬 栄養葉が花のように見える
オカラノオ	サクラソウ科			C	初夏 虎の尾のような白い穂状の花
オケラ	キク科			C	初秋、アザミに似た白い花
オトギリソウ	オトギリソウ科			★	夏 花弁やがく片に黒点や黒線がある
カノツメソウ	セリ科			C	夏～秋 白い小さい花多数

カントウタンポポ	キク科		C	春 総苞上部に突起があるタンポポ
キクバドコロ	ヤマイモ科		B	夏 つる状 カエデのような葉
キッコウハグマ	キク科		★	秋 花は白い小花 閉鎖花が多い
キツネノカミソリ	ヒガンバナ科		C	夏 カミソリのような葉 朱赤の花
キバナアキギリ	シソ科		★	秋 キリに似た黄色い花
キラソウ	シソ科		C	春 葉が地を這う 紫色の花
コオニタビラコ	キク科		C	春 黄色い花 春の七草ホトケノザは本種
コスミレ	スマレ科		★	葉裏は淡紫色 コスミレというが大きくなる
コバギボウシ	ユリ科		★	夏 筒状釣鐘型の淡紫色の花
サラシナショウマ	キンポウゲ科		C	秋 白い穂状の花はブラシのよう
シシウド	セリ科		A	夏 大型 小さな花が傘状に咲く
シュンラン	ラン科		B	春 緑色～黄緑色のラン科の花
タコノアシ	タコノアシ科		C	花や実がびっしりタコの足に見立てた
チゴユリ	イヌサフラン科		C	春 群生 稚児に見立てた花は下向き
ツクバキンモンソウ	シソ科		B	春 葉脈と葉裏は紫色 ジュウニヒトエ似
ツクバトリカブト	キンポウゲ科		C	夏～秋 毒草 兜のような紫色の花
ツリガネニンジン	キキョウ科		B	夏～秋 釣鐘のような薄紫の花
ナルコユリ	キジカクシ科		C	春 鳴子に見たてた白い花が垂れ下がる
ニオイタチツボスミレ	スマレ科		B	春 かすかな芳香のスマレ
ニガクサ	シソ科		B	夏 淡い紅色の小さい花
ニリンソウ	キンポウゲ科		C	春 葉の間に2個の白い花
ノダケ	セリ科		C	秋 暗紫色の小さい花多数
ハッカ	シソ科		★	夏 淡い紫色の小花が輪生
ハンショウヅル	キンポウゲ科		C	春 半鐘のような形をした赤紫色の花
ヒトリシズカ	センリョウ科		C	春 10 cm程度 白い花糸が目立つ
ヒメウズ	キンポウゲ科		C	春 うつむいて咲く白っぽい小さい花
ヒヨドリバナ	キク科		★	夏～秋 白い筒状の花が多数集まる
フジカンゾウ	マメ科		C	秋 淡紅色の花がフジの花に似る
フタリシズカ	センリョウ科		C	春 2個の白い花穂が立ちあがる
フデリンドウ	リンドウ科		A	春 蕾は筆先のように開くと青紫のリンドウの花
ホタルカズラ	ムラサキ科		C	春 ホタルの光にたとえた青紫色の花
ホタルブクロ	キキョウ科		C	春 釣鐘型の花をつける。
マルバスマレ	スマレ科		★	春 白花のスマレ
ミヤマナルコユリ	キジカクシ科		C	春 花柄は左右斜め 白い花が垂れ下がる
ヤナギイノコズチ	ヒユ科		C	柳の葉に似る細長いイノコズチ
ヤマホトギス	ユリ科		B	夏～秋 白っぽい花は上向きに咲く
ヤマユリ	ユリ科		B	夏 強い芳香の白い大きな花
リュウノウギク	キク科		★	晩秋 茎葉は竜腦の香り 白いキクの花
リンドウ	リンドウ科		A	秋 釣鐘形のうす紫の花
ワレモコウ	バラ科		★	夏～秋 暗赤紫色のがく片が花弁に見える

環境省 千葉県 千葉市レッドリスト カテゴリーの対応

環境省(2020)	千葉県(2017・植物 2019 動物)	千葉市(2004)
絶滅危惧種 I A類 (CR)	最重要保護生物 (A)	最重要保護生物 (A)
絶滅基危惧 I B類 (EN)	重要保護生物 (B)	重要保護生物 (B)
絶滅危惧 II 類 (VU)	要保護生物 (C)	要保護生物 (C)
準絶滅危惧 (NT)	一般保護生物 (D)	要保護生物 (C)

チョウ類

チョウ類は種ごとに異なる食草をもつなど植物と密接な関係があり、その地域の植生の状態を把握する指標となります。堂谷津の里は、森林、草地、湿地など様々な環境が存在することから多くのチョウ類が生息しています。里山の環境が劣化する中であってオオムラサキ、ミヤマセセリなどかつての里山を生息地とするチョウ類が見られることは自然度が高い里山であることを示唆しています。

堂谷津の里で確認したチョウ類

科名	種名	春季	夏季	秋季	冬季	県RL	食草・食樹
セセリチョウ	ミヤマセセリ	○				B	ブナ科 クヌギ コナラ
	イチモンジセセリ	○	○	○			イネ科 チガヤ
	チャバネセセリ			○			ススキ チガヤ
	オオチャバネセセリ		○			B	タケ ススキ
	コチャバネセセリ	○	○				ササ タケ
	ギンイチモンジセセリ	○					イネ科 ススキ チガヤ
	ヒメキマダラセセリ	○	○	○			イネ科 チヂミザサ
	キマダラセセリ	○	○				ススキ
	ダイミョウセセリ	幼	○				ヤマノイモ オニドコロ
アゲハチョウ	ナミアゲハ	○	○	○			ミカン科 サンショウ
	キアゲハ	幼	幼○	○			セリ科 ミツバ シシウド
	アオスジアゲハ	○	○	蛹			クスノキ科 シロダモ
	ナガサキアゲハ	○	○				ミカン科 サンショウ
	ジャコウアゲハ		○				ウマノスズクサ類
	モンキアゲハ		○				ミカン科
	クロアゲハ	○	○	○			ミカン科 サンショウ
	オナガアゲハ	○	○			C	ミカン科 コクサギ
	カラスアゲハ		○				ミカン科 コクサギ
シロチョウ	モンシロチョウ	○卵幼	○	○			アブラナ科 イヌガラシ
	スジグロシロチョウ	○卵幼	○	○			アブラナ科 イヌガラシ
	キタキチョウ	○	○	卵幼	○		マメ科 ハギ ネムノキ
	モンキチョウ	○	○				マメ科 シロツメクサ
	ツマキチョウ	○					アブラナ科
シジミチョウ	ムラサキシジミ	○	○		○		ブナ科 スダジイ クヌギ
	ムラサキツバメ				○		マテバシイ スダジイ
	ウラナミシジミ			○			マメ科
	アカシジミ		○			C	ブナ科
	ミズイロオナガシジミ		○			C	ブナ科
	ルリシジミ	○	○				マメ科 ブナ科 ミカン科
	ツバメシジミ		○				マメ科
	ヤマトシジミ	○	○	○			カタバミ
	ベニシジミ	幼○	○	○	○		ギンギシ スイバ
	ゴイシシジミ			○			タケ類
	ウラギンシジミ		○	○	○		マメ科 フジ クズ
タテハチョウ	テングチョウ	○					エノキ
	メスグロヒョウモン		○	○			スミレ類
	ミドリヒョウモン		○	○		C	スミレ類
	ツマグロヒョウモン	○	○幼	○			スミレ類
	コムスジ	○	○				マメ科 クズ
キタテハ	○	○	○	○		カナムグラ	

	ゴマダラチョウ	幼	○		幼	C	エノキ
	アカボシゴマダラ	○幼	○	○	幼		エノキ コナラ
	オオムラサキ	幼	○		幼	B	エノキ コナラ
	コムラサキ		○			C	ヤナギ科
	アサギマダラ		○				ガガイモ科
	イチモンジチョウ		○				スイカズラ科
	ルリタテハ	○幼			○		サルトリイバラ
	ヒメアカタテハ	○			○		キク科 ヨモギ サ
	アカタテハ	○	○幼				イラクサ科 カラムシ
	ヒオドシチョウ	○				B	ニレ科 ヤナギ科
ジャノメチョウ	ヒメウラナミジャノメ	○	○	○	○		イネ科
	ヒメジャノメ		○	○			イネ科 カヤツリグサ科
	コジャノメ	○	○	○			イネ科
	ヒカゲチョウ		○	○			ササ タケ
	ジャノメチョウ		○			C	イネ科 カヤツリグサ科
	サトキマダラヒカゲ	○	○	○			ササ タケ
	クロコノマチョウ	○	幼蛹	○	○		イネ科 ヨシ

トンボ類

トンボは、流水域、止水域、湿地(田んぼ)によって種が異なります。また、季節的にも春・初夏・夏・秋のトンボ、季節を横断するトンボがいます。堂谷津の里は、湧水の流れにオニヤンマ、池周辺にニホンカワトンボ、秋の田んぼにはアキアカネなど場所や季節によって様々なトンボが見られます。

堂谷津の里で確認したトンボ類

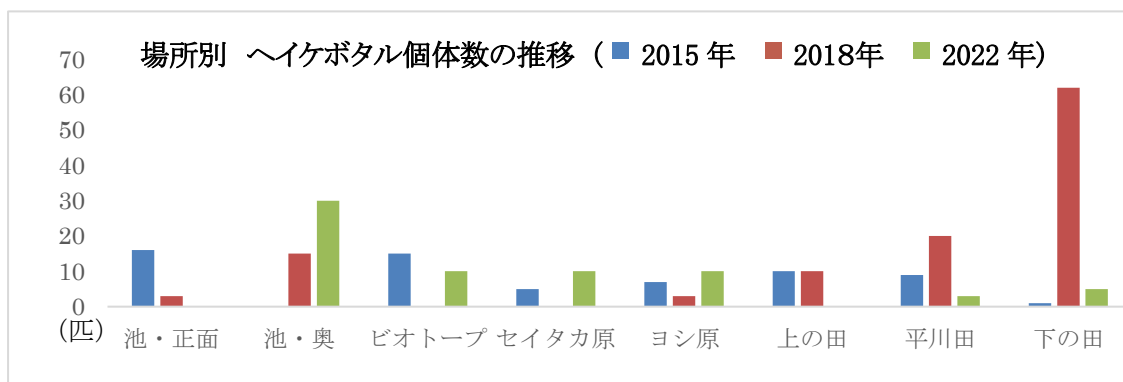
科名	種名	春季	夏季	秋季	冬季	県RL	備考
イトトンボ	アジアイトトンボ	○	○				湿地、田んぼ
	セスジイトトンボ	○				B	池 沼 湿地
アオイトトンボ	オオアオイトトンボ	幼	○	○	○		樹木に産卵、湿地林縁
	ホソミオツネイトンボ*	○			○		成虫越冬
カワトンボ	ハグロトンボ	○	○	○			薄暗い湿地
	ニホンカワトンボ	○					清流を好む 川
サナエトンボ	ヤマサナエ	○				D	流れの近く林縁
	キイロサナエ	○				B	流れ近くの林縁
オニヤンマ	オニヤンマ	幼	幼○	○	幼		林縁の小川 湿地
ヤンマ	ギンヤンマ		○	○			植物の多い池 沼
	カトリヤンマ		○			B	池 沼 湿地近く
トンボ	シオカラトンボ	○	○	○			田んぼ、広い止水域
	オオシオカラトンボ	○	○	○			田んぼ、広い止水域
	シオヤトンボ	○	○				湿地近く
	ショウジョウトンボ		○				田、池、広い止水域
	ノシメトンボ		○	○			湿地近く、林縁
	コノシメトンボ		○			D	植物の多い湿地近く
	ナツアカネ		○	○			植物の多い湿地近く
	アキアカネ	○	○	○	○		初夏成虫、暑さに弱い
	マユタテアカネ		○	○			植物の多い湿地近く
	ウスバキトンボ		○	○			止水域 南から移動
	チョウトンボ		○			D	植物の多い湿地近く

ヘイケボタル

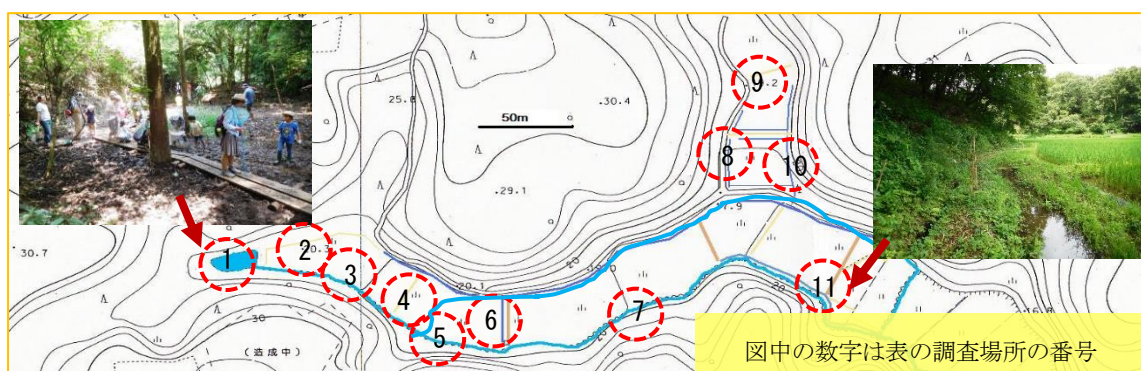
ヘイケボタルは、環境順応性があるため適度な湿地、餌となる水生昆虫、産卵のための草地、蛹となるための土壁、まわりに木がある薄暗い所など生息環境を整えることで増やすことを期待できる生き物です。

出現ピーク日における場所別個体数(匹) (2015年～2022年)

年度		2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	備考
N0	調査場所 日にち	7/20	7/30	7/11	7/30	8/9	7/28	8/3	7/19	
1	堂谷津の池	16	10	4	3	19	2	1		池 湿地
	〃 池奥			2	15	14	10	15	30	
	〃 ビオトープ始点		8				3			
2	池への遊歩道(道路～池入口)	4	5						6	
3	舗装道路～ビオトープ	11	3	5					4	草原
4	ビオトープ下荒地(セイタカ草地)	5						5	10	
5	ヨシ原エリア	7	4		3				10	ヨシ原
6	上の田エリア	10	8	5	10					水田
7	平川田エリア	9	11	8	20	11	3		3	
8～10	東の田斜面林、奥		2							〃 田・土水路
11	下の田	1	4	24	62	14	11	1	9	
合計		62	55	48	113	58	29	22	72	



調査場所



2015年から本格的にヘイケボタルの分布や個体数調査、水辺環境の状態とその変化を把握してきました。その結果、2018年をピークに減少傾向にありましたが2022年、増加の兆しが見えてきました。生息場所は、いずれも適度な湿地となっています。一時多く見られた下の田の南側土水路、畔での減少は、整備が行き届いていないことにもあります。生息域が広がりつつあることから、整備区域を広げていくようにしました。(整備区域は、本文:ホタル保全整備計画図)

ニホンアカガエル

ニホンアカガエルは、冬に産卵する特異なカエルです。繁殖は水辺で行われることから冬期湛水の田んぼは絶好の産卵場所となります。アカガエルは森林・草地と水辺を往復しながら生活することから、それらが繋がっている里山を好み、毎年多くの卵塊を確認することができます。

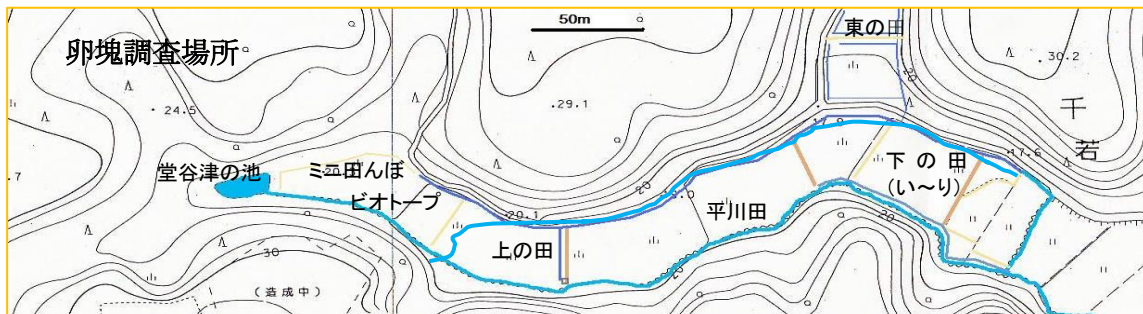
調査場所ごとの卵塊数の推移

調査場所		年度									
		2014	2015	2016	2017	2018	2019	2001	2021	2022	
下の田	いの一	8	49	30	19	78	141	36	58	15	
	い	13	117	64	42	255	205	24	169	8	
	ろ	22	104	32	54	310	131	69	70	8	
	は	8	55	56	71	90	75	48	34	24	
	に	5	28	42	23	45	17	16	15	11	
	ほ	2	22	8	3	7	12	12	42	5	
	へ		6	13	9	111	65	7	69	9	
	と	1	22	2	9	65	23	1	8	10	
東の田	ちり	1	7	2	10	36	4		7		
	ハウス右側	1				1			1		
	ハウス左側			4	20	3	23				
	1～2 段目境界水路	4	14	2		3	7	7	12	22	
平川田	東の田ビオトープ			12		10	13	3	15		
	平川さん田・下	44	66	14	10	124	151	15	62	53	
上の田～ ビオトープ	平川さん田・上					4	57	13	2		
	平川田・上の田の間の水路	2	7	1	6	2	25	2	36		
	道路沿い水路		31		19	22	27	5	30		
	上の田		62	29	44	146	83	37	31	39	
池	ミニ田んぼ			19	5	44	13	20	13	6	
	堂谷津の池			15					7		
合計		110	590	327	336	1356	1078	319	744	211	

産卵状況（初見日、ピーク日）

※ 産卵を初めて確認した日を初見日としています

年度	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
初見日	2月21日	2月3日	2月16日	2月21日	2月11日	2月21日	1月23日	2月9日	2月15日
ピーク日	3月4日	2月24日	2月23日	3月7日	3月2日	3月6日	1月30日	3月4日	2月22日



冬期湛水の田んぼにつながる森林の整備が進むにつれて、ニホンアカガエルの卵塊が増加、2018 年は、ほぼ全域に多くの卵塊が見られました。その後は増減を繰り返し、2022 年は 211 個と大幅に減少しました。このような減少には複雑な要因が絡んでいて原因の特定は容易でないことから、今後、長期間の継続調査によるデータの積み重ねが不可欠と考えます。